

### アジアにおける養豚衛生の課題と 第4回アジア養豚獣医学会への期待

柏崎 守<sup>†</sup> (日本豚病研究会会長)



第4回アジア養豚獣医学会 (APVS 2009 in つくば) が今年10月26～28日の3日間、茨城県つくば市で開催される。アジア養豚における生産管理をはじめ、疾病や獣医療などの研究発表や情報交換を行う国際集會である。アジア養豚が発展

する鍵は生産や衛生の管理技術の改善にあると指摘されており、現場で直面している課題が多く取り上げられ討論が行われることになる。

集會には、世界中から養豚獣医師、研究者、技術者、生産者などの関係者が来日を予定しており、日本の養豚事情を理解してもらう格好の機会でもある。日本獣医師会の会員構成獣医師には是非とも参加の上、情報交換をしていただきたい。

#### 1 アジア養豚の衛生事情

アジアの養豚は着実に拡大している。アセアン諸国における飼養頭数をみても、ベトナムは2,700万頭、フィリピンは1,200万頭を飼養する養豚大国であり、タイ、インドネシア、台湾なども日本や韓国と肩を並べる飼養規模である。しかし養豚が農業の基幹的部門であるとはいえ、口蹄疫や豚コレラなどの伝染病の防疫をはじめ、飼養管理や衛生管理の改善、優良遺伝資源の確保や育種改良、飼料資源の確保、環境保全など解決すべき多くの技術的問題を抱えている。

アジアの養豚においてとりわけ深刻なのは衛生問題である。アジア地域では依然として、口蹄疫や豚コレラなどの急性伝染病がしばしば流行して甚大な経済的被害が発生しているばかりか、畜産物の国際貿易や農業政策に深刻な影響を与えている。たとえば、台湾の養豚はアジ

アで最初に生産効率の高い大規模養豚を実現し、わが国の豚肉輸入の4割を台湾産で占める時期があったが、1997年の口蹄疫発生で壊滅的打撃を被り、かつての輸外型養豚は内需型産業としての存在となってしまった。タイもプロイラーに次ぐ輸出産業として養豚振興を推進してきているが、口蹄疫や豚コレラの防疫問題が豚肉輸出のネックとなっている。韓国では2000年と2002年に牛と豚の口蹄疫発生で総額4,500億ウォンの損失を被ったが、口蹄疫再発の可能性や豚コレラの清浄化が最大の課題となっている。さらにマレーシアの養豚は、1998年から1999年にかけて新興のウイルス性脳炎の発生を受けて環境規制が一段と強化されたほか、期限付きの集中養豚地域化 (IPFA) 計画が実施されたほどである。

21世紀はアジア太平洋の世紀といわれる中、アジア養豚の発展にとって伝染病の防圧は避けて通れない緊急の課題である。まずは関係する国・地域が協調して防疫政策の一体的な展開を図ることがもちろん重要であるが、それと同時に農場段階においても防疫管理の強化に取り組み、いわゆる防疫チェーンの構築に協力することも重要である。第4回APVSは「養豚獣医診断技術向上のために」をスローガンに掲げており、国・地域にまたがる防疫問題も取り上げられるものと期待している。

#### 2 学会設立に貢献した二人の獣医師

APVSの設立は、韓国のJeong Hyun-Kyu (鄭 賢圭) 獣医師と日本の豊浦雅次獣医師の二人に負うところが大い。ジョン獣医師は、1991年に設立された韓国最大の養豚組合であるドッドラム (Dodram) に所属して、組合加入農場における獣医療とコンサルティングを中心に養豚経営の支援や人材育成に携わっておられる。彼は韓国を代表するオピニオン・リーダーであり、しばしば来日して農場視察や講演活動を行っているので存知の方も多からう。

<sup>†</sup> 連絡責任者：柏崎 守 (日本豚病研究会)

〒305-0074 つくば市高野台3-9-6

☎ 029-836-5226 FAX 029-836-5226

E-mail : kashiwa@mail2.accsnet.ne.jp

豊浦獣医師は1982年に豚専門の診療所を開設し、生産者との契約による定期農場訪問による生産獣医療を中心とする農場支援の全国展開を図った。こうした獣医診断サービス体制を採用する養豚場は多く、豚病対策のロールモデルとして関係者から高い評価を受けていることは周知のことである。この業績により1995年に日本豚病研究会「藤崎優次郎賞」を受賞した。

彼らの実践的な活動を通じて学ぶべきことは実に多いが、共通する理念は“獣医療の産業貢献”ということに尽きよう。この理念はすべての産業動物獣医師にとって大切にしなければならぬ。

ジョン獣医師が2001年10月、豚生産者団体主催のセミナーに招かれて来日した折、以前から親交のあった豊浦獣医師とアジア養豚の衛生事情を巡って議論を交わした。その背景には、その前年（2000年）に韓国やわが国で牛の口蹄疫発生があり、両国間では人的、物的交流が多く伝播リスクが高いとの警戒感があったのだろう。二人の考えは、アジア養豚の発展は衛生問題の解決と生産管理の改善なくしてあり得ないとの認識で一致し、その結論としてアジアで養豚にかかわっている獣医師、技術者、研究者、さらには生産者も含めた国際集会を定期的に開催することであった。しかしその準備に取り掛かろうとした矢先、豊浦獣医師は53歳の若さで急逝した。

案件を持ち帰ったジョン氏は、韓国養豚獣医師会（韓国獣医師会の下部組織で会員約150人）の同意を得て、各国関係者の理解を得るため、関係国に足を運んでカウンターパートとの折衝を続けた。2002年春、韓国のジョン氏、日本からは故豊浦氏の遺志を受け継いだ大井宗孝獣医師をはじめ、タイ、マレーシア、中国、フィリピンから約15名の獣医師がソウルに集まり、アジア養豚の持続的発展という目標を共有してAPVSが誕生するに至った。また、APVS理事には日本から石川弘道獣医師（日本養豚開業獣医師協会）が選出された。

### 3 アジア養豚の発展を目指して

APVSの第1回集会は2003年にソウル、第2回集会は2005年にマニラ、第3回集会は2007年に武漢（中国）で開催された。各研究集会にはアジアをはじめ、欧米から獣医師、研究者、技術者、生産者など多数の関係者が参集し、日本からも毎回30～40名が参加して研究発表をはじめ、講演等を行ってきた。いずれの集会においても先端的な研究成果が披露される一方で、生産現場で直面している技術的課題に関する調査研究の成果が積極的に発表されている。さらに、アジアの国・地域における養豚事情や地域性の高い疾病や飼養問題などをめぐって活発な討論が交わされてきた。

APVSの設立は2003年のことで日は浅いが、アジア地域において生産性の高い養豚経営ができる環境をつく

り出すために、生産現場に視点を置いた学術活動を行っているユニークな学術団体である。さらに、養豚のいろいろな分野で活躍している関係者が一堂に会するインターセクショナルの学術集会なので、幅広い情報交換が可能であり、研究ニーズの把握、技術開発の促進、生産現場への技術普及などに対して大きなインセンティブを与えるものとして国の内外から高い評価を得つつあるようだ。

今秋開催の集会もこれまでの運営方針を踏襲する方針であり、生産者公開セミナーも開催することとしている。開催にあたっては企業、法人、行政機関、生産者団体など多方面からの支援の下、養豚関係研究団体の日本豚病研究会、(中)日本養豚開業獣医師協会、日本養豚学会および日本SPF豚研究会が連携して実行委員会を組織して主催する。達成目標として、①アジアの国・地域等で養豚に携わっている様々な分野の人の連携強化、②アジアの国・地域等の養豚において解決すべき技術的課題の整理、③アジアの国・地域等における豚生産ベンチマーク（生産成績）の評価の3項目を掲げている。なお、第4回集会の詳しい情報はホームページ(<http://apvs2009.org/>)をご覧ください。

### 4 期待される養豚獣医師

豚肉貿易の世界でも産地間競争はますます激しくなっており、わが国における豚肉自給率は重量ベースで約50%まで低下した。自給率は業界パワーを示すバロメーターともいえるが、戸数7千戸で年間1,600万頭以上の肉豚生産を行う世界有数の豚生産国であることに変わらない。だが、高密度で大量飼育する近代的な養豚は疾病被害ではむしろかつてより大ききリスクを背負うようになっており、獣医師の日常的な関与が欠かせるようになってきている。

近年、生産現場では新疾病の発生に加えて疾病の病態はますます多様化した。臨床経験が豊かな豚専門の獣医師でさえ、病気の診断を行い、経過を予測して最良と思われる治療・予防措置を行っても、予想した結果になるとは限らない事例も多く、複雑で際限のない多くの臨床的問題を抱えるようになってきている。このため、定期的な農場訪問による診断サービスを生産者と緊密な連携のもとで実施し、より真実に近い臨床的判断やその評価が行える生産獣医療の環境を構築する地道な努力が行われている。生産者参画型の生産獣医療は診断・治療・予防に有効なだけでなく、生産者の衛生意識や生産技術を一段と高めるほか、農場に見合った生産目標の設定や生産管理工程の変更などに際してより正しい判断がくだせるなどの利点が生まれている。これは(中)日本養豚開業獣医師協会の会員を中心に取り組まれているが、豚の生産獣医療の新たな展開方向として大いに期待されている。

こうした取り組みは生産者との信頼関係をより高めるだけでなく、“獣医療の産業貢献”という充足感を見い

だす機会も増えよう。さらには養豚獣医師の不足が叫ばれる中、獣医師自らがピッグ・プライドの姿勢を世に広く示すことで獣医学生の養豚獣医療への関心がさらに高まるものと確信している。そういった観点からも APVS

の国内開催には大きな意義があり、養豚獣医師はもちろんのこと獣医学生を含めて一人でも多く参加してもらい、一丸となって“獣医療の産業貢献”をPRできればと願っている。

---